

読

Yomiuri
Nippon
Symphony
Orchestra

響

グルック(ワーグナー編)
歌劇「オーリードのイフィジェニー」序曲
GLUCK (arr. WAGNER): "Iphigénie en Aulide" Overture

フランツ・シュミット
歌劇「ノートル・ダム」から
間奏曲と謝肉祭の音楽

FRANZ SCHMIDT: Intermezzo and Carnival Music
from the Opera "Notre Dame"

フランツ・シュミット
交響曲第4番 八長調

FRANZ SCHMIDT: Symphony No. 4 in C major

常任指揮者

セバスティアン・ヴァイグレ

Conductor= SEBASTIAN WEIGLE

FRANZ SCHMIDT

次はシュミットを照らせ!

ブラームス、ブルックナーらウィーンの伝統を受け継ぎ、
近年再評価が高まる作曲家 フランツ・シュミット。
ヴァイグレは彼の音楽を「ぐっと心を掴むような美しさと
夢中にさせるエネルギーに満ちている」と評する。
「音楽史は、まだ定まっていない。これから僕らが作るんだ。」

読売日本交響楽団 第609回 定期演奏会

2021 6.29(火)19:00

サントリーホール

S¥7,600 A¥6,600 B¥5,600 C¥4,100

Subscription Concert No. 609

Tuesday, 29th June 2021, 19:00 Suntory Hall

読響チケットセンター 0570-00-4390

(10時-18時・年中無休)

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成: 文部科学省文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)

独立行政法人日本芸術文化振興会

協力: アフラック

ヴァイグレ&読響の深まる関係性と高まる意欲 フランツ・シュミットの魅力に迫る一夜



常任指揮者

セバステアーン・ヴァイグレ

2019年4月から読響第10代常任指揮者を務めるドイツの名匠。ベルリン生まれ。1982年からベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者として活躍後、指揮者に転身。2003年にフランクフルト歌劇場でR.シュトラウス『影のない女』を振り、雑誌『オーパングェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれた。04年から09年までバルセロナのリセウ大劇場の音楽総監督を務め、08年からフランクフルト歌劇場音楽総監督の任にある。同歌劇場は『オーパングェルト』の「年間最優秀オーケストラ」や「年間最優秀歌劇場」に輝くなど、その手腕は高く評価されている。パイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭、ウィーン国立歌劇場、メトロポリタン歌劇場、ベルリン放送響、ウィーン響などで活躍している。

常任指揮者ヴァイグレが、昨年冬に続き、二度目の14日間の隔離を経て、満を持して《定期演奏会》の指揮台に上がる。

ヴァイグレが今回取り上げたのは、オーストリアの作曲家フランツ・シュミット。19世紀末から20世紀のウィーンに生きたシュミットは、ブルックナーのもとで作曲を学び、マーラーが指揮するウィーン・フィルでチェロを弾いた。ウィーン伝統をたっぴりと受け継いだその管弦楽作品からは、芳醇な口マンが色濃く薫る。今回は、彼の若き20代後半に書かれたオペラ的作品と、円熟期の50代後半の交響曲という対照的な2曲を取り上げ、作曲家シュミットの知られざる魅力に迫る。



読響

メインとなる交響曲第4番は、シュミット最後の交響曲。美しく、深い抒情性を湛えながら、その背景は早世した娘の追悼という悲哀に満ちている。トランペットが静かに奏でる冒頭の旋律は、何かに向かって呼びかけるよう。長大な一つの楽章の交響曲はこの旋律から紡がれ、収束していく。相反する感情や葛藤に苛まれるように、起伏に富んだ全体はどこか危うい雰囲気にも包まれている。大戦前の不穏な空気が流れる時代、あらゆる前衛芸術が誕生する中、最後までウィーン伝統を貫いたシュミットの到達点とも呼べる傑作だ。作品と誠実に向き合うヴァイグレのタクトは、この隠れた名作に命を吹き込み、困難な時代を生き抜く私たちの心にこそ深く呼びかけるだろう。

前半には、ヴィクトル・ユーゴーの小説「ノートル・ダム・ド・パリ」を下地にした歌劇からの音楽を披露する。現在は、映画やミュージカルでも親しまれる題材だ。歌劇では、ジブシーの美女エスメラルダを中心に、彼女を巡る男たちの愛憎劇が描かれる。今回演奏する「間奏曲と謝肉祭の音楽」は、歌劇に先立って完成した3つの部分から成る。いわば、歌劇のエッセンスがこの曲に詰まっているといっても過言ではない。ジブシー風の情熱や哀愁が備わった曲調をお楽しみいただきたい。

また、冒頭は来年2月のR.シュトラウスの「エレクトラ」につながる物語を描いたグルックの歌劇「オーリードのイフィジェニー」序曲で幕を開ける。オペラ改革を成し得たグルックと編曲者のワーグナー、そしてドイツ・オーストリア音楽の伝統を重んじたシュミットが、奇しくも一つの線で結ばれる。独逸系のオペラとシンフォニーに心血を注ぐヴァイグレと読響による新たな挑戦を、どうぞお聴き逃しなく。

読売日本交響楽団 第609回 定期演奏会

2021年 6月29日(火) 19時開演

サントリーホール

東京都港区赤坂1-13-1 Tel. 03-3505-1001

S ¥7,600 / A ¥6,600 / B ¥5,600 / C ¥4,100

●東京メトロ南北線「六本木一丁目」駅(3番出口)より徒歩約5分 ●東京メトロ銀座線「溜池山王」駅(13番出口)より徒歩約7分

■学生券 学生の方は、開演15分前に残席がある場合、¥2,000で入場できます(要学生証/25歳以下)。ただし席を選ぶことはできません。開演1時間前から受付で整理券を配布します。

■都合により曲目、出演者等が一部変更される場合もございます。 ■ご購入いただいたチケットは、公演が中止になった場合以外でのキャンセル・払い戻しはできません。あらかじめご了承ください。 ■未就学児のご入場は、固くお断りいたします。 ■マスク着用など、読響の「感染予防対策」にご協力をお願いします。

読響チケットセンター 0570-00-4390

*10時-18時・年中無休

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

*座席選択可/チケット郵送料無料



プレイガイド

チケットぴあ 0570-02-9999

サントリーホールチケットセンター 0570-55-0017